さまざまな分野の
It's KONAN
Style
スタイル
第一線で活躍する卒業生

日本の文化である“墨絵”を世界へ広めていきたい

観客の視線が集まる中、大胆に振るう筆の先から現れる龍の姿。
着物姿にタスキ掛けで、一発勝負のライブペイントに挑むのは、墨絵師の井上さん。
墨絵師として本格的に活動を始めたのは30歳のとき。
会社員として働きながら個展や創作活動を続け二足のわらじを履いていたが、36歳で独立。
一体なぜ墨絵師に?これまでの経緯や、現在の活動をインタビューしました。

PROFILE
墨絵師
井上（いのうえ） 慶美（よしみ）さん
2010年、理工学部生物学科卒業。株式会社ファンケルなど化粧品メーカーの企画・マーケティング部門を渡り歩いた後、墨絵師に転身。SNSでは墨絵パフォーマンスをはじめ、子育て、化粧品企画などを使い分けて発信し、総フォロワー数43万人（2025年9月現在）。

フランス留学がきっかけで日本文化に目を向けるように

「将来は化粧品の開発にかかわりたい」。理工学部の学生だった井上さんは、そんな思いを抱き、世界的コスメブランドが集まるフランスへ一か月間留学。現地の工場で話を聞かせてもらったとき、逆に相手から日本の技術や文化を称賛されたという。「それまで日本の良さにまったく目を向けてこなかったので、日本文化を知らない自分が恥ずかしかった」。

大学卒業後、化粧品メーカーで働きながらも、そのことはずっと胸にくすぶっていた。日本文化について身をもって学び、そのすばらしさを世の中へ伝えたい。そう考えて、墨絵を始めた。「白と黒の濃淡だけで表現することが魅力で、その繊細さも日本らしいと思いました」。

20代のころは会社員の傍ら、京都や大阪の路上で墨絵の似顔絵を描いたり、作品を販売していた。当初から着物姿で描いていたというから、路上ではおそらく目立つ存在だったに違いない。現代的なタッチは「墨絵なのにオシャレ」と言われ、買ってくれる人も増えていった。仕事の関係で東京に移ってからは、お台場でも描いた。30歳で個展を開くようになると、創作活動を本格化。会社員との両立が難しくなり、36歳で独立に踏み切った。

墨絵のパフォーマンスをSNSで発信。見せ方や伝え方にマーケティングのキャリアが生かされている。

「人類みな麺類」プロデュース店の巨大看板が初仕事に

転機は突然、訪れた。井上さんの活動に興味をもった甲南ＯＢの株式会社亀井堂総本店の社長から、親しい飲食業の社長を紹介していただくことになった。かくして大阪アメリカ村に出店する人気ラーメン店「人類みな麺類」プロデュース店の屋外看板を描くことになる。店のコンセプトが伝わるように、筆のタッチを生かしつつ、和風のド派手な絵柄に仕上げた。この初仕事がきっかけで、依頼をリピートしていただき、別の飲食店からも声がかかるようになる。

現在の活動の主軸は、作品づくりのほか、店舗の看板や内装壁画の制作と、イベントやパーティーで行うライブペイントだ。大阪梅田の阪急百貨店やイギリスの高級車ロールスロイスの東京ショールーム、東日本大震災後に再建された福島県龍台寺の落慶祝賀会など、依頼があればどこへでも訪れ、観客の前で墨絵を描く。

井上さんの墨絵は、金箔や蛍光色を取り入れたりと、チャレンジングで従来の概念にとらわれない。「日本文化を伝えようにも、興味をもってもらえなければ始まらない」と考えるからだ。通常であれば、墨絵は余白を生かすことで、濃淡の美しさを引き立てる。しかし、井上さんはあえて余白に市松や麻の葉などの文様を盛り込んでみることも。「伝統文様には、〝繁栄〟や〝健やかな成長〟など、一つひとつ意味がある。そんな日本文化も伝えたいから」。

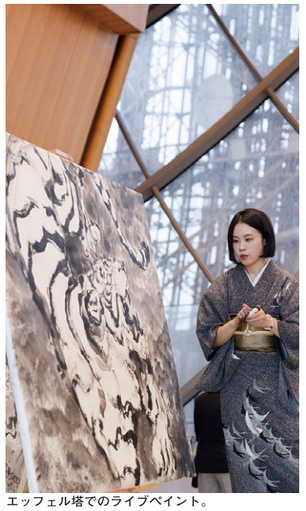
約15年の時を経てフランスへ今度は日本文化を伝えに

忘れられないライブペイントがある。２０２４年11月、井上さんはフランスへ飛んだ。エッフェル塔で開かれる茶会とコラボレーションして墨絵を描くために。東京タワーとエッフェル塔の親交から生まれたこのイベントは、資金をクラウドファンディングで募ったが、なかなか集まらず実現不可能かと思われた。しかし、ある日突然、目標金額が達成する。甲南ＯＢの株式会社エイブル＆パートナーズ代表取締役会長兼社長が強力に支援してくれたのだ。「おかげで実現できました。本当に感謝しています」。

ライブペイントでは茶会に合わせ、躍動する「龍」と「虎」を描き上げた。現地の方からも好評で、「日本に行ってみたい！」と声が上がった。墨絵を通して日本文化を広めるという願いが、形になった瞬間だった。

井上さんがここまで歩んでこれたのは、墨絵を学び、日本文化としてどう伝えていくのか、墨絵で目の前の人を喜ばせるにはどうすればいいのか、真摯に向き合ってきたからだろう。そして、応援してくれる人々の存在も大きかった。「振り返れば、甲南大学のネットワークには随分支えられてきました」。初仕事は甲南ＯＢが縁をつないでくれた。フランス留学は奨学金「甲南大学同窓会甲南会チャレンジ基金」で行くことができた。「甲南大学に行ってなければ、今の私はなかったかも（笑）」。

日本文化を発信したい思いは、さらに「日本を元気にしたい」「自分の国にある文化のすばらしさに気づいて、誇りをもってほしい」と深まっていく。そのためにも墨絵の新たな表現を模索し、描き続けていく。



エッフェル塔でのライブペイント。

現地の方から興味津々な視線を浴びつつ、描き上げた。